

小 園 城

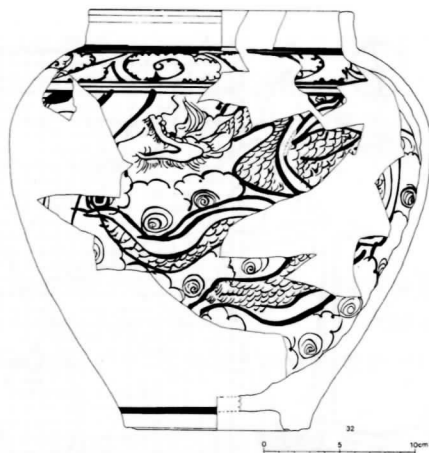
本田 秀樹

多良岳の斜面を西流する千綿川が大村湾に注ぎ込む河口付近は、狭小の沖積平野が形成されている。小園城はその平野を見下ろす千綿川左岸の舌状台地先端部、標高28～32mに位置し、行政的には東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷小園に所在する。周辺には瀬戸古墳や野中キリシタン墓碑（県指定）の他、五輪塔の残る清心寺跡や小峰城跡があり、古代・中世を通じて千綿川を拠点とする在地勢力が連綿とあったことを示している。

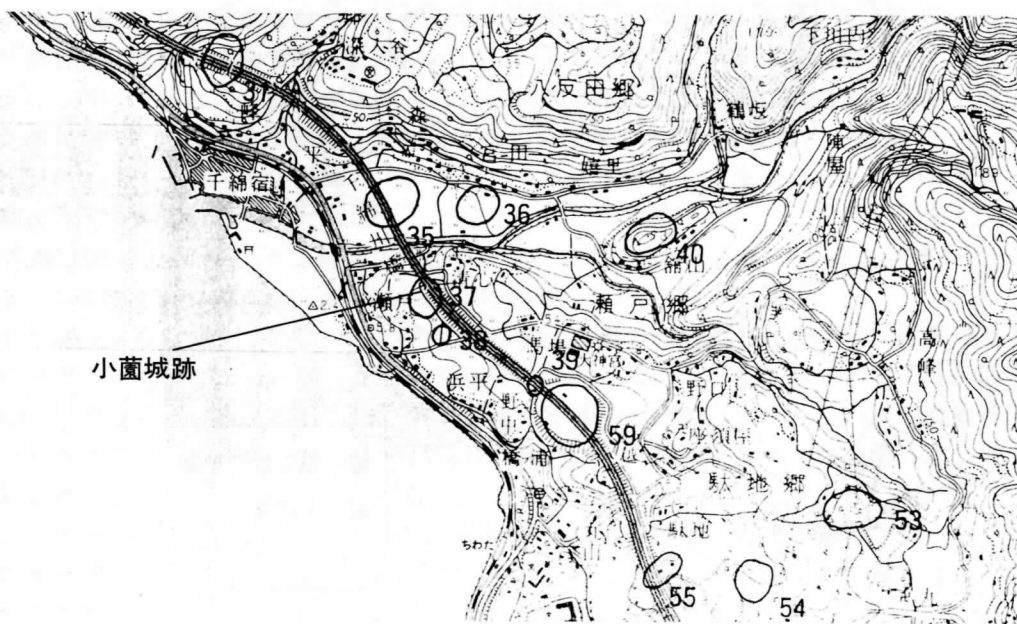
本城が一般に知られるようになったのは、昭和61年に九州横断自動車道建設に伴い発掘調査が実施されたことによる。調査では旧石器～近世までの遺物と、中近世の掘立柱建物跡や土壌墓・空堀といった遺構が確認された。

『大村郷村記』では小園城について「荘屋より丑寅の方貳町程瀬戸と云所にあり、本丸東西拾四間、南北拾貳間、田の中少し小高き処なり、四方とも田地にして堀無し、由緒不知」と記述され、出土遺物や遺構から当地に比定する見方をとる。

調査結果で目を引くのは空堀である。幅6～7mの堀が尾根を切るように南北にのび、それに続く幅3m前後の堀はほぼ直角に西へ屈曲する。



第1図 越州窯系陶器 (S=1/5)

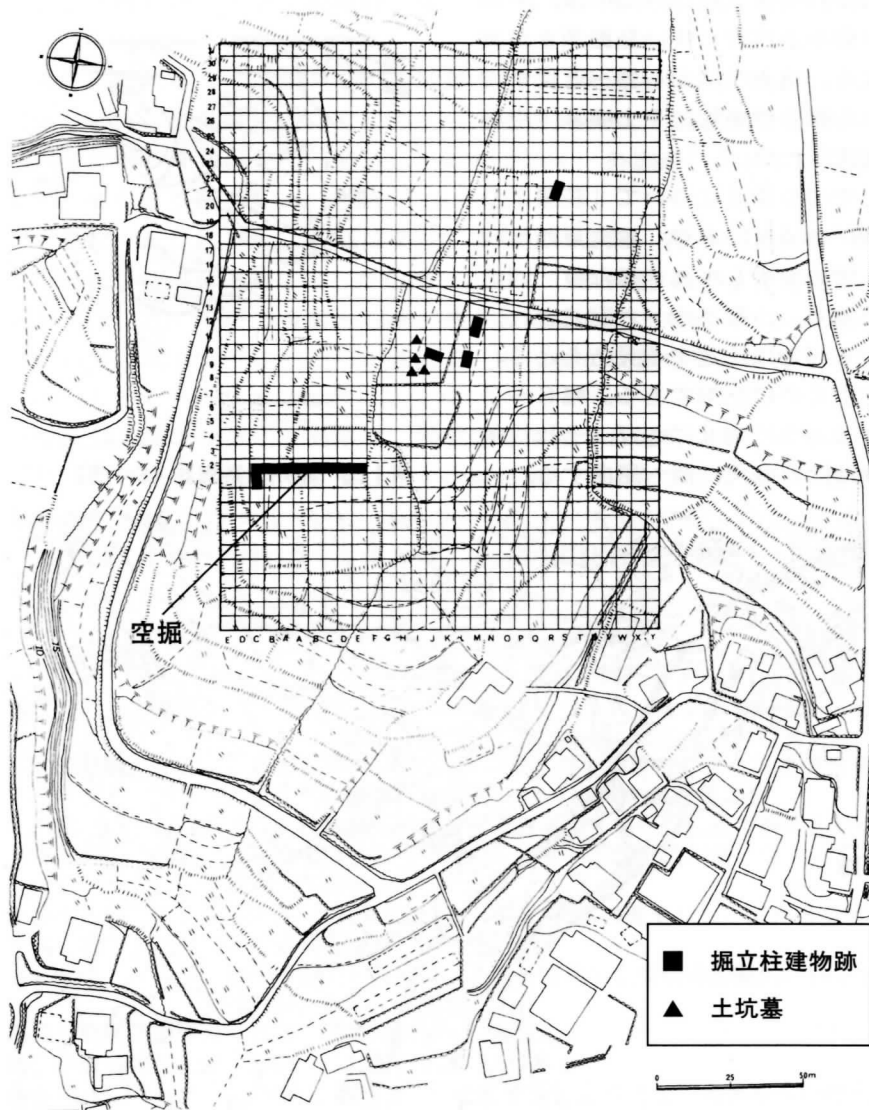


第2図 小園城位置図 (S=1/25,000)

出土遺物には14世紀後半の輸入陶磁器や土師器・石鍋等があり，なかでも磁州窯系陶器（第1図）は出色である。同窯の破片は本城の北に隣接する宮田中ノ壺遺跡（旧・宮田A遺跡）や博多遺跡群からも出土しており，これらの輸入陶磁器類を入手できるような環境下にあったことを窺わせる。

この他，中世と目される遺構としては掘立柱建物跡や土墳墓がある。ただし，これらの遺構はそれぞれ時期も異なり，小園城との関連については今一つ判然としない。

江戸初期に千綿川上流には井堰が築かれ，本城のある台地は水田化がすすんだとされる。城の縄張りについて全体像を把握しえないのも，著しい土地の改変に起因するものと思われる。調査結果からすると，土塁は見られず，堀や曲輪の削りも未発達で強固な防御機能を有するイメージはない。しかも尾根上が継続的に利用されていることを考え



第3図 小園城遺構配置図 (S=1/2,500)

合わせると，小園城は「城郭」ではなく，在地土豪の「屋敷」的な感を受ける。この一帯は彼杵荘という荘園が成立し，嘉暦四年（1330）には荘内が一分領主によって分割知行されている記事がある。14世紀初めの『正慶乱離志裏文書』にはここを本拠とした「世戸又五郎，同七郎」の名がみえ，在地土豪の一人として世戸氏を挙げておきたい。